

特別寄稿

一編集者としての雑誌づくり



仁科 典子

I. はじめに

はじめまして。私は、医師向けの月刊医療情報誌『ジャミックジャーナル』の編集者です。みなさんは、できあがった図書を提供する、というお仕事をされていることでしょう。私たちは、かたちのないところから始め、雑誌というかたちにしています。今回は、その編集現場の様子をご紹介します。

II. 雑誌のできるまで

1. 取材前

年間予定や、特集・テーマは、編集長から与えられます。もちろん、編集部員の提案があることもあれば、他部署との協議で生まれる記事もあります。多くの場合、そのテーマに沿って、取材先を探します。取材相手は、インターネットや雑誌・新聞など、あるいは、ドクターとのやりとりを含め、いろいろな情報源から候補をあげていきます。「お会いしてみたい」「お話を伺ってみたい」と何ともいえない感覚での反応を大切に、日頃から、話題のストックをつくっています。

取材のための人脈づくりを目的に何か特別に行う、ということはありません。記事についてのやりとりをしていくなかだったり、伺った先で一席設けてくださったり、学会やシンポジウムで一緒したり……。さまざまな場面で、ご紹介していただいたり、話題をご提供してい

ただいたりしています。また、日頃からやりとりを重ねているドクターなどに「こういう取材をしたいのですが、どなたかふさわしい方をご存知ありませんか」とご厚意に甘えさせていただくこともあります。

読者側のニーズの把握については、確固たるものがあるわけではありません。もちろん、時折アンケートを採ったり、資料請求のはがきに添えられたメッセージが届いたり、ということもあります。取材の際やその後のやりとりで、直接お伝えしていただけることもあります。

2. 取材に出掛ける

開業された事例を連続して取り上げる記事についてご紹介します。開業はドクターにとって一大事ですから、ドクターの半生を伺うことになります。趣味や家族構成、いろいろなことが、開業と併せてかたちになっていくのです。

リハビリ室にサンドバッグをおいていたドクターは、空手も道場をもつほどの腕前で、アスリートとしての経験からチームドクターやスポーツ選手の主治医を勤めていました。

また、こだわりぬいて建てられた医院に、すてきな額が飾ってありました。伺ってみるとドクターのお父さまからの開業祝いの作品だったのです。

3. 出会うドクターの素顔はさまざま

もちろん、開業事例の記事に限らず、出会ったドクターはさまざまです。

医師は医療だけを行うものではないのではないか、と研修医時代から考えていたドクターが、

NISHINA Noriko

(株)日本医療情報センター

nishina@jamc-net.co.jp

あるとき、自分がやりたいのはホスピスだと気づきました。そして、ホスピス医を募集していた病院に連絡し、翌日には飛行機で訪ねていたのです。その後、その病院に着任して重ねた研鑽をもとに、帰郷して後継者を捜していた病院を医療法人ごと継承し、ホスピス開設にこぎ着けたのでした。

これは女性ドクターの事例です。急に体調を崩した父親の医院を継承して開業しました。結婚以来、夫である大学病院外科系教授は、単身赴任を続けている状況です。週末は夫のところへ新幹線で出張のように訪ねる生活を続けながら、彼女はひとり息子を育て上げました。しかも、御愛息が進学のために家をでられた今なおお若く、生き生きとしていらっしゃるのです。

さらに、ユニットケアを導入したドクターは、見事に医療機関を生活の場へとかえていました。病院も終の棲家となり得るはずだと考え、「自宅でない在宅」を実現させているのです。もちろん、ひとりでできることではありませんが、率先して取り組む熱意が、ちょっとお会いしただけでも充分に伝わってきました。

4. 記事にする、書く

これは、あくまでも私見ですが、意図というものは案外働かないものなので、「こう読みたい」という思いを私はあまりもちません。読んだ人がどう感じ取るかは全くの自由であって、書く側が決めてかかるものではないと考えるのです。むしろ、こういう記事を書いてみたら、どこか何らかのヒントになるものがあるのではないか、という思いで書いています。

また、記事を書くときは、そのドクターの思いを伝えたいと思いますので、お話に感じたことも添えることがあります。しかし、これについても、こう書けば伝わるというような作業ではないと思います。「このドクターすごいんだよ」とただ伝えても伝わらないので、どうすごいのかだけを書いていく。つまり、どういうことをされているからすごいと感じたのか、とい

うあたりです。それを読んで、すごいと感じるかどうかは、読み手次第ではないでしょうか。

とにかく、「すごい」ということを伝えたいという意図を私が一方的に持つよりは、特に弊誌は夜勤の合間にばらばらとめくられるようなものですから、読みやすく、肩の力が抜ける記事を届けたいなあ、と思います。それでいて、ここはまねしてみよう、と何か抱えているトラブルを解決するきっかけになったり、こんなにがんばっている人がいるのだから、明日もがんばろう、と思えるきっかけになったりするといなあ、と書いているのです。

3. 取材の後に

お話を聞かせていただいて、「たのしかった」とおっしゃっていただけるとほんとうにお邪魔してよかったなあ、とうれしくなります。草稿を作成すると、FAXやメールで内容をご確認していただき、デザイナーにレイアウトを依頼します。できたものはFAXして再度ご確認いただいています。そして、できた掲載誌をお届けしています。このやりとりのなかで時候の挨拶や近況報告を織り交ぜてくださる取材相手とは、何となくその後もおつきあいが続いていきます。実際には、取材したときよりも、その後のやりとりのほうが、人脈構築に大きな割合を占めているように感じます。

Ⅲ. 雑誌が発行されてから

取材させていただいた方が周囲の反響を報告してくださることも結構あります。この場合、ほめてくださるご連絡が多く、また、ご協力いただいた方によるこんでいただけるのは、非常にありがたいことです。

また、同僚が取材したドクターが、電子カルテの導入を検討していたことがありました。私はIT関連の記事をよく担当するのですが、そのひとつをご覧になって、どの電子カルテを選択するかを決められた、と聞いたときには、とてもうれしかったですね。

IV. ふりかえってみると

1. こんなこともありました

少し特異な事例ですが、編集を通じてとても印象的だったことがあります。ある開業医からその医院を手がけたインテリアデザイナーを紹介されました。それ以来、その開業医ともインテリアデザイナーとも、折あるごとにお会いして、開業後の様子を伺ったり、インテリアデザイナーがその後手がけた医院をご紹介していたいだいたりしています。

あるとき、別の開業医が「今度新規開業する勤務医がいます。いずれ取材してはいかがですか」とご紹介くださいました。その時点で建築工事は終わっていたのですが、内装工事がまだだときいていたので、私は軽い気持ちでインテリアデザイナーについて話題にしました。

その後、勤務医はそのインテリアデザイナーに会いに行き、彼の手がける空間に身を置く開業をしました。さらに、新規開業事例として、私もお話を伺ったのです。なんだか、とてもうれしい取材でした。

2. 力沸く方々

私はIT関連の記事をよく担当してきたこともあって、医療IT関連に関心の高いドクターや、ベンチャー企業の方々とも何度も顔を合わせることになり、親しくさせていただいています。医療分野も多角的な視野から、様々な取り組みが行われていることを強く感じています。

こうして、現状に甘んじることなく、もっとよい方法があるのではないかと探る方々とは、医療ITの分野に限らず、どこでお目にかかっていても力が沸いてくるようです。

V. 紙媒体での情報発信

さて、「情報の氾濫」というようなことがいわれて久しくなりました。情報の取捨選択ということが、非常に重要になっています。個人の情報発信も多彩になりましたが、ホームページなどは、情報発信源が「単」だと感じています。

私たちは、編集部全体で話し合っていくので、「複」という情報発信源となり、その点では大きく異なると思います。もちろん、有料だとか無料だとか、ということについては、仕事にする上での覚悟はありますが、私としては、必ずしも無料の情報が劣っているということでもないと考えます。むしろ、紙媒体であることについて、差別化はあると思っています。

紙媒体であることの制約というのは、なんといっても量に制限があることでしょう。お伝えしたいことがたくさんあるとき、泣く泣く原稿量を調整していくことがあります。書くことが目的ならば、紙を継ぎ足したり、ページを増やしたりして調整するのも知れませんが、しかしながら、それでは有効な情報にはならないでしょう。デザイナーと協議して、見た目を整えることも大切なことです。

VI. おわりに

雑誌というのは、発行しておしまい、というものではありません。バックナンバーをめくって、何か思うこともあるでしょう。私自身、弊誌の古い号をみて時の移ろいを感じたり、このときはあであったなあ、などと思い出したりすることがたくさんあります。

病院図書室で、患者さんが受け取った本も、きっと、そういう存在ではないでしょうか。病院図書室で、あるいは院外の図書館や書店で、かつて差し出された本の背表紙が並んでいるのに会うことは、病気やけがと向き合って生きていた時間を思い出す、そんな鍵のような存在なのではないでしょうか。

情報発信は、手軽にできるようになりました。有益な情報を選び出すことも、また情報に惑わされることも、これまで以上に増えていくでしょう。適切な本を選ばれることも重要ですが、その本にまつわる思い出づくりの環境を整えることも、大切な仕事かも知れませんが。